

熊本学園大学 機関リポジトリ

## 本田幸介関係文献目録

著者	土井 浩嗣
雑誌名	海外事情研究
巻	40
号	1
ページ	167-177
発行年	2012-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1113/00000069/">http://id.nii.ac.jp/1113/00000069/</a>

## ＜資 料＞

# 本田幸介関係文献目録

土 井 浩 嗣

## はじめに

本田幸介は、朝鮮の京畿道・水原に設置された朝鮮総督府勸業模範場の初代場長を務めた人物である。1930 (昭和 5) 年 4 月に彼が亡くなった際の追悼記事で「朝鮮農業開発の祖<sup>1)</sup>」と形容されたことから分かる通り、本田幸介は朝鮮植民地農政の確立に多大な影響を及ぼした人物であった。しかしながら、これまでの朝鮮植民地期農業史研究では、この本田幸介のみならず朝鮮で活動した農政官僚や農学者全般について、その経歴や論稿など研究の基盤となる諸情報の整理・分析がほとんど行われてこなかった<sup>2)</sup>。そこで、今回本田幸介が残した著作・調査報告書および彼に関係する雑誌記事を広く調査・収集・整理することによって、[表 - 1] [表 - 2] の目録を作成することにした。以下では、これらの目録を参照するための前提として、本田幸介の経歴や朝鮮農政との関わりなどについて概観しておくことにしたい<sup>3)</sup>。

1) 一記者「朝鮮農界の恩人本田博士を偲びて」(『朝鮮農会報』第 4 巻 5 号, 1930 年 5 月) 14 頁。

2) これまで先行研究で取り上げられたことがあるのは、わずかに高橋昇と久間健一の二人だけである。

まず高橋昇は、勸業模範場西鮮支場(黄海道・沙里院)の支場長を務めた人物である。高橋昇に関する研究・資料類としては以下のものがある。高橋昇著、飯沼二郎・高橋甲四郎・宮嶋博史編集『朝鮮半島の農法と農民』(未来社, 1998 年 2 月)、徳永光俊・高光敏・高橋甲四郎編『写真でみる 朝鮮半島の農法と農民 元朝鮮農試・高橋昇写真集』(未来社, 2002 年 3 月)、高橋昇著、新納豊・高橋甲四郎編『朝鮮の犁』(日本経済評論社, 2003 年 3 月)、河田宏『朝鮮全土を歩いた日本人 農学者・高橋昇の生涯』(日本評論社, 2007 年 12 月)。また、農林省熱帯農業研究センター編集『旧朝鮮における日本の農業試験研究の成果』(農林統計協会, 1976 年 3 月)も参考になる。

次の久間健一は、朝鮮小作官を務めた人物である。飯沼二郎氏は植民地農政に対する批判を行った代表的人物として久間健一に言及している(飯沼二郎『朝鮮総督府の米穀検査制度』未来社, 1993 年 9 月, 73~80 頁)。

3) 本田幸介の詳細な経歴や勸業模範場など朝鮮への勸農機関設置の経緯に関しては、拙稿「併合前後期の朝鮮における勸農体制の移植過程 本田幸介ほか日本人農学者を中心に」(『朝鮮学報』第 223 輯, 2012 年 4 月)を参照されたい。

## 1. 渡韓までの本田幸介

本田幸介は、1864 (元治元) 年 1 月に薩摩藩士野村盛秀の次男として現在の鹿児島県に生まれた。名は野村幸熊であったが、ほどなくして本田仲次郎の養子となり、名も本田幸介と改めている。1880 (明治 13) 年 9 月に東京の駒場農学校農学科に入学、86 年 7 月に同科を卒業すると<sup>4)</sup>、農商務省に入省する。89 年 8 月には、東京農林学校教授に就任、翌 90 年 6 月には同校の改編にともなって帝国大学農科大学助教授となった。1891 年 6 月、本田幸介は畜産学研究の命を受けドイツに留学することになり、約 4 年後に帰国すると農科大学で畜産学講座を開設・担当、また 99 年には農学博士の学位を授与されて日本最初の農学博士の一人となっている<sup>5)</sup>。

こうして日本における畜産学研究の第一人者となった本田幸介は、1903 (明治 36) 年に農事調査のために吉川祐輝とともに清国・韓国に派遣されることになった。本田は清・韓両国で自らの専門である牛・馬・豚や養鶏などを中心に視察・調査を行っている。なかでも後に赴任することになる韓国 (朝鮮) では、原野が多く牧畜に好適の地であると当時予想されていた咸鏡道方面の調査に入っている。しかし、日露戦争前のこの時期、「朝鮮の人心は非常に動揺して孰れに往つても官民共に奥地に這入るといふことに対しては一身の安全を保障して呉れないのみならず殆んど強制的に夫れを留め<sup>6)</sup>」るといった現地の状況もあって、結局このときは咸鏡道で十分な調査を実施することができなかった。

まもなくして日露戦争が勃発すると、日本政府農商務省は戦後の朝鮮経営を見越して、朝鮮半島全域にわたる大規模な農事調査である「韓国土地農産調査」を計画することになった。本田幸介は、農務局長酒匂常明の下で古在由直 (農事試験場長) とならんでこの調査の計画・立案に指導的な役割を果たすことになる。さらにそれだけでなく、本田は自らも原熙 (東京帝国大学農科大学助教授)、鴨下松次郎 (農事試験場技師) とともに以前満足の調査ができなかった朝鮮北部地方の現地調査に赴いた。本田

4) 1886 年 7 月卒業の農学科同期には、岡田鴻三郎、吉川寛次郎、陸原貞一郎、伊地知徳之助、岡田眞一郎、楠原正三、知識四郎、片田豊太郎、舟木文次郎、田原休之丞、福家梅太郎、松崎祇能、橘彪四郎がいる。また同時期の農芸化学科卒業生には、古在由直、石井新太郎、吉田彦松、鴨下松次郎、早川元次郎がいる (『東京帝国大学卒業生氏名録』東京帝国大学、1933 年 9 月、347・359 頁)。

5) 1899 年 3・6 月に日本最初の農学博士となったのは次の 10 名である。沢野淳、古在由直、恒藤規隆、横井時敬、玉利喜造、本田幸介、酒匂常明 (以上、駒場農学校系統)、新渡戸稲造、佐藤昌介、南鷹次郎 (以上、札幌農学校系統) (三好信浩『日本農業教育成立史の研究』風間書房、1982 年 3 月、335 頁)。

6) 本田幸介「朝鮮を去るに臨んで」(『朝鮮農会報』第 14 巻 11 号、1919 年 11 月) 3 頁。なお、本田幸介「朝鮮農業の既往を顧みて」(『朝鮮彙報』大正 8 年 12 月号、1919 年 12 月) も同文章の記事である。

らは1905年4月に東京を出発して同年11月まで平安道，黄海道，咸鏡道を対象に視察・調査を行い，帰国後その成果を『韓国土地農産調査 平安道』『同 黄海道』『同 咸鏡道』および『重要作物分布概察図 黄海道及平安道』『同 咸鏡道』という形でまとめている。なお，このときの調査について本田は，「当時は我国の軍隊は北の満洲まで進んで居りまして朝鮮の民心も鎮静して居つて，多少交通機関或は宿舍等に不便は感じましたけれども何等の危険なく視察することが出来たのであります<sup>7)</sup>」と後年述懐している。



〔写真－1〕1919年頃の本田幸介  
(出典)『朝鮮農会報』第14巻12号  
(1919年12月)

## 2. 本田幸介と朝鮮農政

第2次日韓協約締結によって韓国が日本の保護国となると，1906(明治39・光武10)年2月，漢城に韓国統監府が設置された。同年3月に着任した初代統監伊藤博文は，朝鮮農業の振興を韓国(朝鮮)の根本課題の一つと認識し，農政で指導的役割を担う人物として本田幸介を招聘することにした。彼が選ばれた理由について資料から明確に読み取ることはできないが，これまでに「韓国土地農産調査」など朝鮮の農事調査に直接携わってきた経験に加えて，当時朝鮮でたびたび発生していた牛疫への対策が急ぎ求められていたことも大きな理由の一つであったと推察される<sup>8)</sup>。

1906年5月，本田幸介は韓国(朝鮮)に渡り，ただちに統監府勸業模範場長に就任した。ただし，彼の渡韓時点では勸業模範場は単に法令上設置されたに過ぎず，その実態は全くともなっていなかった。本田幸介の下で設置場所が漢城(後の京城，現ソウル市)の南方，京釜鉄道沿いの京畿・水原に決定され，用地の買収や建物・農場・器械などの整備が進められていった。最終的に農事試験研究機関としての勸業模範場が実質的に開設されたのは，1907年5月15日の開場式の頃であった。

この保護国期の本田幸介に関して，雑誌記事資料には，「先生は斯くて其の職は一

7) 本田幸介前掲「朝鮮を去るに臨んで」3～4頁。

8) 本田幸介「韓国の牧畜」(『農事雑報』第73号，1904年6月)，[時重初熊]『韓国牛疫其他獣疫二関スル事項調査復命書』(農商務省農務局，1907年)，山脇圭吉『日本帝国家畜伝染病予防史 明治篇』(獣疫調査所，1935年3月)，三木栄「朝鮮牛疫史考」(『朝鮮学報』第34輯，1965年1月)，山内一也『史上最大の伝染病 牛疫』(岩波書店，2009年8月)参照。

模範場長であつたが、統監の命によつて朝鮮農業政策の基礎方針樹立に腐心し、之れを統監に進言献策する處があつた<sup>9)</sup>」と記されている。すなわち、本田は、ひとり農事試験研究機関の長という立場にとどまることなく、農政分野の事実上のトップとして朝鮮農政の最初の骨格を形作る上で主導的な役割を果たすことになったのである。それは彼が勸業模範場附設の水原農林学校長や韓国中央農会副会頭を兼任していた事実からも明白であろう。そして、本田は1910年8月の韓国併合後も引き続き朝鮮総督府勸業模範場長、水原農林学校長(1918年4月からは水原農林専門学校長)、朝鮮農会副会頭を務めていくことになるのである。その後、本田幸介は19年11月に病を得て朝鮮を離れることになるが、この間彼は終始一貫して朝鮮農政の中核の人物でありつづけたと考えられる。

こうした朝鮮農政に対する本田幸介の影響力の大きさを象徴するのが、以下に挙げる朝鮮農政の基本方針である。

- 一、当国の農業は未だ個人経済を免れずして物産共通の途発達せざるが故に作物の分配適当ならず従て生産上損失少なからず将来交通機関の発達に伴ひ気候土質の適否に鑑み適所に適応作物を配置して生産力を増加せんとす
- 二、農作物の種類善良ならざるが故に産額従て多からざるのみならず品質亦劣等なり之が改良を図らざるべからず
- 三、気候と土質とに鑑み新作物を輸入して新物産を増加せんことを期す古来新作物の物産として固定する迄には多大の困難と幾多の歳月とを要するは歴史の示す所なり希くは勸業模範場は其適否を考究し以て当事者に蹉跎なからしめ又早く其固定を見せしむることを得ん
- 四、農産の豊ならざる一大原因は肥料の欠乏にあり今其供給の方法を探究して之が普及を図るは焦眉の急なり
- 五、水利の施設全からざるため生産力は大に阻碍せられ又不時の災害を被り生産減少するを見る若し夫れ適宜の度に於て漸次改良を加ふる所あらば生産の安固と増加とを来すべきは蓋し疑を容れざるなり
- 六、土地利用の途完からず有用の地にして放棄せられたるものあるが故に之が利用方法を講ぜば生産の増加を来すや必然なり
- 七、家畜家禽並に其製品に関する事業も改良増殖の余地頗る多し其一般の改良は多くの歳月と資本とを要するを以て俄に実行すべきにあらずと雖も養鶏養豚の改良の如きは比較的容易なるべし
- 八、養蚕は気候の関係上適当なりと認むるも従来殆んど見るべきものなし若し其

9) 前掲「朝鮮農界の恩人本田博士を偲びて」15頁。

普及宜しきを得ば生産著しく増殖せらるべし

九、農業の副業は生産上重要な関係を有するものなるに係らず韓国に於ては毫も注意せられざるなり是亦将来大に奨励を加ふるの要あるべし<sup>10)</sup>

これら9項目からなる農政方針は、1907年5月15日の勸業模範場開場式に当たって、統監伊藤博文の指示を受け本田幸介が作成したものとされている。本来は開場式で勸業模範場の目標を披露するためにまとめられたものであったが、その後朝鮮総督府殖産局や農林局が発行した『朝鮮の農業』の「総説」に、内容・表現を簡潔にした形で毎年欠かさず掲載されつづけていくことになった<sup>11)</sup>。その意味で本田幸介は、併合前後期から戦時体制期までを貫く朝鮮植民地農政の方向性をまさに決定づけたと言てよいのである。

### 3. 帰国後の本田幸介

日本内地に戻った本田幸介は、朝鮮で患った病の療養に努めたのち、1921（大正10）年1月、新設された九州帝国大学農学部教授となり、初代農学部長に就任した。しかしながら、[表-2]を見ても分かるように、帰国後の本田幸介は全くと言ってよいほど論稿を残していない。そのなかで幸いにも九州大学農学部同窓会が発行した『同窓会報』に、九州帝国大学時代の本田幸介が描かれた回想録がわずかながら収録されている。以下その一部を引用することにしたい。

[前略] 本田先生の下で一種家族的雰囲気とでも云うものがあって和気がただよっていた。毎日の昼食は小使のおばさんが、この人が料理が上手で、夫々にお膳に結構な御馳走をつくってくれて、今の会議室で昼食会が開かれ、安くてうまくて温かくて勿論弁当持参の必要はなく楽しいものであった。[中略]

土曜の午後などは本田先生の命令一下、太宰府へのエキスカッション、筑紫耶

10) 本田幸介前掲「朝鮮を去るに臨んで」5～7頁。

11) 例えば、『朝鮮の農業』1942年度版の「第一章 総説」には次のように掲載されている。「一 気候土質の適否に鑑み適所に適応作物を分布すること 二 在来作物の品種を改良すること 三 有利なる新作物を輸入し栽培の普及を図ること 四 肥料の増施を図ること 五 水利灌漑の設備を改善すること 六 未墾地の利用を増進すること 七 家畜家禽並に其の製品の改良増殖を行ふこと 八 養蚕其の他の副業の奨励を行ふこと」（『朝鮮の農業』朝鮮総督府農林局農政課、1942年4月、1～2頁）。

なお、『朝鮮の農業』の「総説」には、次に挙げる農政実行の際の四大要綱も毎年掲載されているが、これも本田幸介の作成とされている。「一 奨励事項の多岐に渉らざること 二 其の実行簡易にして費用の支出は皆無又は少額なるべきこと 三 其の効果の的確なること 四 実地に就き具体的に指導を為すこと」（同書、2頁）。



馬溪行，名島海岸にたいらぎ貝採りなどに行ったものだ。[中略]

先生と当時の東京帝大総長の古在由直先生とは御郷里も共に鹿児島で無二の御心友だった。その古在先生がその頃はよく和服に草履姿で福岡においでになった。御宿は勿論本田先生のお宅である。「古在先生が見えているから今夜遊びに来給え」と若造連が召集される。御座敷でお茶やお菓子の御馳走になるのはいいがその御座敷の真中の畳の上に枕が一つ、その一つの枕にお二人で頭をのっけて反対の方向におやすみになっている。われわれはそれを取りまいて円座に坐っていると云う世にも珍妙な配置である。われわれを聴手にしてお二人の昔話がはじまる。「古在先生という人は風呂の嫌いな人でね、伯林に一緒にいた時なんか、君、浴室に無理に閉ぢ込めなきゃはいらないんだからね、不潔な人だよ」古在先生はボツリと「だけど君達、僕は勉強したよ。この人ときたらちっちゃい男のくせに鼻眼鏡を買ったり（会議室の先生の写真は鼻眼鏡である）髪をテカテカ分けて見たりおしゃればかりしていたもんだ。君、勉強も少しはやっていたのかね」と応酬される。甲府から静岡への最も安上りで短い行き方は富士のてっぺんを越ゆるがいい話、古在先生を散髪させるには二、三人で理髪台に引き据えねばならなかった話等々お二人共総入歯をガクガクいわせての御話がつきない。[以下略]<sup>12)</sup>

ここからは本田幸介の九州帝国大学での生活ぶりや人となりまで感じ取ることができる。またそれ以上に、本田幸介と古在由直という駒場農学校の同期の絆がいかに強いものであったのかということも知ることができる。

## おわりに

1919（大正8）年11月3日の道農業技術官打合会の席上、本田幸介は朝鮮を去るにあたって次のような講演を行っている。

で斯の如く技術方面に於いても実は第一期の時代は終へた積りであります。これからして第二期に入る所であります。第一期の時世は洵に荒ごなしであつて所謂創業の時代でありまして私のやうな粗放な性能を有つて居るものでも大体に其の事に干はることが出来たのであります。けれども第二期に入りましては事が緻密になつて来る。又第一期中に怎うしても解決しなかつた所の色々なる事件に対

12) 伊藤寿刀「本田幸介先生の事など」（『同窓会報』第12号、九州大学農学部同窓会、1961年12月）16～18頁。『同窓会報』には他にも水原農林専門学校から九州帝国大学農学部に入學した趙伯顯氏の「昔を偲ぶ」という記事もある（『同窓会報』第21号、九州大学農学部同窓会、1971年12月）。

してもこれから研究，実験，調査を経なければなりませんまいと思ひます。この研究なり実験なり，調査なりは今迄に較れば二倍も三倍も緻密になつて往かなければならぬと思ひます。随つて然ういふものに関する所の機関も亦一層勘考を要する事でありませう<sup>13)</sup>。

ここでいみじくも彼自身が語っている通り，本田幸介は1906年から1919年という朝鮮植民地農政の「創業の時代」あるいは「第一期」に，その主軸となって活躍した農学者であった。ちなみに彼の後任には大工原銀太郎が，さらにその後任には加藤茂苞と，本田以降も朝鮮の勸業模範場長には日本内地の著名な農学者があいついで就任している。しかし，彼らと朝鮮農政との関わりについても本田幸介同様，従来の研究では全く言及されてこなかった。これは今日までの植民地期農業史研究が，農政官僚・農学者・農業技師の経歴や任免状況を整理すると同時に，日本内地も含めた彼らの人的ネットワークを解明することに関して特に関心を払ってこなかった結果と言えるであろう。本稿で行った本田幸介関係文献目録の作成がそうした新たな視点からの基盤研究の一助になれば幸いである。

---

13) 本田幸介前掲「朝鮮を去るに臨んで」9頁。



〔表-1〕 本田幸介著作・調査報告書

	本田幸介寄贈『明治廿四年五月廿八日 苧麻裁製 天』1891年(明治24)
	和装本,「農商務省」名の原稿用紙使用。 日本・中国の農書類や明治期の報告書・雑誌等から関連箇所を引用して解説。 確認原本:東京大学農学生命科学図書館(請求番号:617-3-1)
	本田幸介寄贈『明治廿四年五月廿八日 苧麻裁製 地』1891年(明治24)
	和装本,「農商務省」名の原稿用紙使用。 日本・中国の農書類や明治期の報告書・雑誌等から関連箇所を引用して解説。 確認原本:東京大学農学生命科学図書館(請求番号:617-3-2)
	本田幸介寄贈『明治二十四年五月三十日 大麻叢説』1891年(明治24)
	和装本,「農商務省」名の原稿用紙使用。 日本・中国の農書類や明治期の報告書・雑誌等から関連箇所を引用して解説。 確認原本:東京大学農学生命科学図書館(請求番号:617-8)
	本田幸介編著『製紙料植物叢説 楮樹 三桎』1891年(明治24)
	和装本,「農商務省」名と「内務省」名の原稿用紙使用。 「明治廿四年六月十三日本田幸介寄贈」の記載あり。 日本・中国の農書類や明治期の報告書・雑誌等から関連箇所を引用して解説。 確認原本:東京大学農学生命科学図書館(請求番号:650-15)
	本田幸介編著『綿圖要務』1891年(明治24)
	和装本,「農商務省」名の原稿用紙使用。 「明治廿四年六月十三日本田幸介寄贈」の記載あり。 日本・中国の農書類や明治期の報告書・雑誌等から関連箇所を引用して解説。 確認原本:名古屋大学中央図書館(請求番号:618.1-H)
	本田幸介著『特用作物論』編輯兼発行人・大野正道,1892年(明治25)6月
	確認原本:国立国会図書館
	本田幸介講述『普通作物論』東京・岡本活版所,1892年(明治25)11月
	確認原本:東京農業大学・友田清彦所蔵
	本田幸介講述『特用作物論』発行兼編輯者・見山慶二郎,1898年(明治31)5月
	1892年(明治25)発行『特用作物論』の再版。 確認原本:名古屋大学中央図書館
	本田幸介講述『普通作物論』発行兼編輯者・見山慶二郎,1898年(明治31)5月
	1892年(明治25)発行『普通作物論』の再版。 確認原本:熊本学園大学・筆者所蔵,名古屋大学中央図書館
	本田幸介講述『養鶏養蜂論』東京・大日本実業学会,発行年月不明
	名古屋大学中央図書館所蔵本に1899年(明治32)3月31日農科大学受入れ印あり。 確認原本:国立国会図書館,名古屋大学中央図書館
	本田幸介先生講述『特用作物論』発行兼編輯者・中込茂作,1901年(明治34)4月
	1892年(明治25)発行『特用作物論』の3版。 確認原本:熊本学園大学・筆者所蔵,名古屋大学中央図書館
	本田幸介著『実業叢書 養鶏学』東京・大日本実業学会,1902年(明治35)6月
	1901年(明治34)5月発行の初版の増補改訂版。 確認原本:国立国会図書館,名古屋大学中央図書館
	『実業図画第一号 各種家禽写生図』東京・国本館,1903年(明治36)11月
	掛図(縦134.5cm×横49.2cm)。 「農科大学教授農学博士本田幸介先生図案並二説明」の記載あり。 確認原本:名古屋大学中央図書館(請求番号:646.1-H)
	本田幸介先生講述『養鶏学講義』東京・平民書房,1906年(明治39)12月
	確認原本:国立国会図書館,名古屋大学中央図書館
	農商務省農務局編『韓国土地農産調査報告 京畿道忠清道江原道』 『同 慶尚道全羅道』『同 平安道』『同 黄海道』『同 咸鏡道』 東京・農商務省,1907年(明治40)
	このうち本田幸介が自ら調査したのは平安道,黄海道,咸鏡道である。 確認原本:筑波大学中央図書館
	本田幸介・原熙著『重要作物分布概察図 黄海道及平安道』『同 咸鏡道』 東京・農商務省,1907年(明治40)
	確認原本:熊本学園大学・筆者所蔵,筑波大学中央図書館

〔表－2〕 本田幸介関係雑誌記事

著者名	項目名	記 事 名	雑誌名	巻号	発行年月	
本田幸介	論説	静岡地方三極ノ病害	農学会会報	13号	1891	明治24 6
本田幸介	論説	畜色ノ單純ナルハ畜産ノ発達幼稚ナル徴ナリ	農学会会報	32号	1897	明治30 1
	雑録	農科大学本田教授ノ特用作物論及普通作物論	農学会会報	35号	1897	明治30 11
	論説	農林学博士及獣医学博士	農事雑報	10号	1899	明治32 4
本田幸介	畜産	日本の畜産	農事雑報	20号	1900	明治33 2
本田幸介談	実務	農家の副業（其一）畜産（一）豚	実業之日本	4巻1号	1901	明治34 1
本田幸介	論説	牧畜不振の原因及其将来	実業之日本	4巻2号	1901	明治34 1
本田農学博士寄贈	口絵	乳牛ホルスタイン種牝牡の図	農事雑報	31号	1901	明治34 1
本田幸介	蚕業及畜産	牛の話	農事雑報	31号	1901	明治34 1
本田幸介談	実務	農家の副業 畜産 豚（二）	実業之日本	4巻3号	1901	明治34 2
本田幸介談	実務	農家の副業 養豚（三）	実業之日本	4巻6号	1901	明治34 3
本田幸介談	実務	畜産 養豚（四）	実業之日本	4巻10号	1901	明治34 5
本田幸介	論説	農法変革論（農業労力の節減）	実業之日本	4巻13号	1901	明治34 7
	雑録	農法変革論	大日本農会報	239号	1901	明治34 8
本田幸介	論説	牧羊論	実業之日本	5巻1号	1902	明治35 1
本田幸介	実務	畜産片言	実業之日本	5巻19号	1902	明治35 10
本田幸介	論説	種畜場増設の要	実業之日本	6巻1号	1903	明治36 1
本田幸介		養鶏談	農事雑報	55号	1903	明治36 1
本田幸介談	実務	養鶏瑣談（上）	実業之日本	6巻4号	1903	明治36 2
本田幸介談	実務	養鶏瑣談（下）	実業之日本	6巻5号	1903	明治36 3
本田幸介	時論	種畜場増設の要	中央農事報	36号	1903	明治36 3
本田博士	時論	畜産論	中央農事報	39号	1903	明治36 6
	雑報	清韓両国の農事調査囑托	中央農事報	40号	1903	明治36 7
本田幸介氏談	雑録	清国牧畜談	実業之日本	6巻18号	1903	明治36 9
	雑報	本田博士一行の帰朝	中央農事報	42号	1903	明治36 9
本田幸介君	訪問	支那視察所感 其一	中央農事報	44号	1903	明治36 11
本田幸介君	訪問	支那視察所感 二	中央農事報	45号	1903	明治36 12
本田幸介君	訪問	支那畜産概観（上）	中央農事報	46号	1904	明治37 1
本田幸介君	訪問	支那畜産概観（下）	中央農事報	47号	1904	明治37 2
		韓国の牧畜（本田農学博士の視察談）	農事雑報	73号	1904	明治37 6
本田幸介	論壇	家畜改良の一端	実業之日本	7巻23号	1904	明治37 11
本田幸介		韓国の畜産に就て	農事雑報	78号	1904	明治37 11
本田幸介		韓国の畜産に就て（承前）	農事雑報	79号	1904	明治37 12
本田幸介談		畜産談	農事雑報	81号	1905	明治38 2
本田幸介		和牛に就て	農事雑報	90号	1905	明治38 10
本田幸介氏談	論説	韓国農業経営論	農業世界	1巻2号	1906	明治39 5
	雑報	韓国の勸業模範場	農事雑報	97号	1906	明治39 5
本田幸介	論説	対清国産業経営策	農業世界	1巻3号	1906	明治39 6
特派員	海外農事	韓国事情（二）	農事雑報	100号	1906	明治39 8
本田幸介		韓国中央農会設立の趣旨	韓国中央農会報	1号	1906	明治39 12
本田幸介君	訪問	朝鮮移住に就て（上）	中央農事報	86号	1907	明治40 5
〔町田咲吉〕	海外農事	韓国勸業模範場	農事雑報	109号	1907	明治40 5
本田幸介	論説	韓国に於ける農業の経営に就て	大日本農会報	312号	1907	明治40 6
町田咲吉	海外農事	韓国勸業模範場	大日本農会報	312号	1907	明治40 6
本田幸介君	訪問	韓国勸業模範場の開場式	大日本農会報	312号	1907	明治40 6
	海外農事	朝鮮移住に就て（下）	中央農事報	87号	1907	明治40 6
	海外農事	韓国勸業模範場開場式（再）	大日本農会報	313号	1907	明治40 7
	海外農事	韓国勸業模範場開場式	農事雑報	111号	1907	明治40 7
本田幸介	海外	韓国農業事情	農業世界	2巻9号	1907	明治40 8
本田幸介	論説	畜産の蕃殖方針	韓国中央農会報	4号	1907	明治40 10
本田幸介	海外農事	韓国に於ける農業の経営に就て	大日本農会報	316号	1907	明治40 10
	雑報	韓国中央農会	中央農事報	92号	1907	明治40 11
	雑報	韓国中央農会発会式	中央農事報	93号	1907	明治40 12
本田幸介	論説	農業改良の第一歩	韓国中央農会報	2巻1号	1908	明治41 1
		名士の朝鮮観	朝鮮	2巻1号	1908	明治41 9
旭邦	文芸	水原行の記	朝鮮	2巻1号	1908	明治41 9
本田幸介	論説	韓国農業の改良に就て	朝鮮	2巻2号	1908	明治41 10
本田幸介	論説	韓国の農業改良に就て	韓国中央農会報	3巻2号	1909	明治42 2
	韓文	本田博士の韓国農業改良談	韓国中央農会報	3巻2号	1909	明治42 2
本田幸介	論説	農業上より観たる満洲と日韓との関係（上）	韓国中央農会報	4巻1号	1910	明治43 1
本田幸介	論説	農業上より観たる満洲と日韓との関係（下）	韓国中央農会報	4巻2号	1910	明治43 2

本田幸介	論説	朝鮮農業に対する所感	農業国	5巻5号	1911	明治44	5
川端源太郎	雑纂	水原勅業模範場を視る	朝鮮	40号	1911	明治44	6
本田幸介	論説	朝鮮農業論	大日本農会報	367号	1912	明治45	1
	雑報	女子蚕業講習所第二回卒業式	朝鮮農会報	7巻2号	1912	明治45	2
本田幸介	時事	朝鮮の農法	帝国農会報	2巻2号	1912	明治45	2
本田幸介氏談	談叢	経済的革命時代に於ける朝鮮農業界	朝鮮及満洲	49号	1912	明治45	3
	雑報	農林学校卒業式	朝鮮農会報	7巻4号	1912	明治45	4
	農界逸話	本田博士のチョンガ生活	農業国	6巻10号	1912	大正元	10
本田幸介	農業	朝鮮の農業	農業世界	7巻13号	1912	大正元	10
本田幸介	論説	朝鮮牛の特長に就て	朝鮮農会報	8巻1号	1913	大正2	1
	雑報	女子蚕業講習所第三回卒業式	朝鮮農会報	8巻2号	1913	大正2	2
	雑報	水原農林学校卒業式	朝鮮農会報	8巻4号	1913	大正2	4
本田幸介	論説	農業技術者としての覚悟に就て	朝鮮農会報	8巻6号	1913	大正2	6
本田幸介		朝鮮に於ける農事改良問題の根本義	朝鮮及満洲	75号	1913	大正2	10
突兀生	訪問印象記	如何にも博士らしい本田農学博士	朝鮮及満洲	75号	1913	大正2	10
本田幸介	論説	農業教育者の責務	朝鮮農会報	9巻1号	1914	大正3	1
篤農山人	農界人物	東大農科卒業生(農学科)	農業世界	9巻5号	1914	大正3	4
本田幸介		勅業模範場と半島産業の開発	朝鮮公論	2巻8号	1914	大正3	8
本田幸介		農家の副業	朝鮮総督府月報	5巻1号	1915	大正4	1
本田幸介	論説	農家の副業採択の標準	朝鮮農会報	10巻1号	1915	大正4	1
本田幸介		朝鮮牛の良性素質助長	朝鮮彙報		1915	大正4	7
本田幸介	論説	始政五年記念朝鮮物産共進会の開催に際し希望を述ぶ	朝鮮農会報	10巻10号	1915	大正4	10
本田幸介	論説	大嘗祭供御新穀耕作者	大日本農会報	413号	1915	大正4	11
本田幸介	論説	会員諸君に告ぐ	朝鮮農会報	10巻11号	1915	大正4	11
本田幸介		農作物の改良	朝鮮彙報		1916	大正5	1
	農界時事	女子蚕業講習所第六回卒業式	朝鮮農会報	11巻3号	1916	大正5	3
本田幸介	論説	米国農業視察談	朝鮮農会報	12巻4号	1917	大正6	4
本田幸介	要纂	米国の農業	朝鮮教育研究会雑誌	20号	1917	大正6	5
	農界時事	朝鮮総督府農林学校第十回卒業式	朝鮮農会報	12巻5号	1917	大正6	5
本田幸介		米大陸視察談	半島時論	1巻2号	1917	大正6	5
本田幸介		北米視察雑感	朝鮮彙報		1917	大正6	6
本田幸介氏談		朝鮮農業の改良할만한二大要点	半島時論	1巻4号	1917	大正6	7
本田幸介		国家的事業として奨めたい綿羊の飼育	朝鮮公論	5巻8号	1917	大正6	8
本田幸介		朝鮮の棉と煙草と甜菜の栽培成績に就て	朝鮮公論	5巻11号	1917	大正6	11
本田幸介	論説	送中村評議員告会員各位辞	朝鮮農会報	12巻11号	1917	大正6	11
本田幸介	論説	朝鮮と牧馬	朝鮮農会報	13巻1号	1918	大正7	1
	農界時事	女子蚕業講習所第八回卒業式	朝鮮農会報	13巻3号	1918	大正7	3
	農界時事	朝鮮総督府農林学校第十一回卒業式	朝鮮農会報	13巻5号	1918	大正7	5
	農界時事	水原農林専門学校開校式	朝鮮農会報	13巻5号	1918	大正7	5
	農界時事	朝鮮総督府農林学校校長在職十年謝恩式	朝鮮農会報	13巻5号	1918	大正7	5
本田幸介		朝鮮の牧羊	朝鮮彙報		1919	大正8	1
本田幸介	論説	朝鮮の牧羊	朝鮮農会報	14巻1号	1919	大正8	1
	農界時事	女子蚕業講習所第九回卒業式状況	朝鮮農会報	14巻3号	1919	大正8	3
本田幸介		朝鮮の牧羊	半島時論	3巻3号	1919	大正8	3
本田幸介		朝鮮の農業改善策	朝鮮及満洲	149号	1919	大正8	11
本田幸介	論説	朝鮮を去るに臨んで	朝鮮農会報	14巻11号	1919	大正8	11
本田幸介		朝鮮農業の既往を顧みて	朝鮮彙報		1919	大正8	12
	巻頭	本田副会頭を送る	朝鮮農会報	14巻12号	1919	大正8	12
本田幸介	巻頭	告別之辞	朝鮮農会報	14巻12号	1919	大正8	12
本田幸介	論説	新春を迎へて	朝鮮農会報	17巻1号	1922	大正11	1
本田幸介	巻頭	朝鮮農業の改良に対する私見	朝鮮農会報	19巻6号	1924	大正13	6
		本田博士記念事業概況 (本田博士記念事業経過) (銅像除幕式の状況) (除幕式に於ける祝辞) (向坂幾三郎「胸像の前に跪きて」)	朝鮮農会報	19巻6号	1924	大正13	6
一記者	論説及彙纂	朝鮮農界の恩人本田博士を偲びて	朝鮮農会報	4巻5号	1930	昭和5	5
賀田直治	論説及彙纂	本田博士の御面影	朝鮮農会報	4巻5号	1930	昭和5	5
	本会記事	本田農学博士の薨去に弔意	朝鮮農会報	4巻5号	1930	昭和5	5
	雑報	故渡部、横井、本田三君略伝	農学会報	324号	1930	昭和5	7
		始政二十五周年記念朝鮮農事回顧座談会速記録	朝鮮農会報	9巻11号	1935	昭和10	11

(備考) 本雑誌記事目録は、以下の各機関所蔵の雑誌原本を調査・確認のうえ作成した。

『韓国中央農会報』仁川・漢城(京城)・韓国中央農会 九州大学中央図書館、東京大学農学生命科学図書館  
『実業之日本』東京・大日本実業学会→実業之日本社 神戸大学社会科学系図書館、横浜市立大学学術情報センター  
『大日本農会報』東京・大日本農会 九州大学中央図書館、神戸大学自然科学系図書館

- 『朝鮮』 漢城（京城）・日韓書房→朝鮮雜誌社  
 『朝鮮彙報』 京城・朝鮮總督府  
 『朝鮮及滿洲』 京城・朝鮮雜誌社→朝鮮及滿洲社  
 『朝鮮教育研究会雜誌』 京城・朝鮮教育研究会  
 『朝鮮總督府月報』 京城・朝鮮總督府  
 『朝鮮農會報』 京城・朝鮮農會  
 『帝國農會報』 東京・帝國農會  
 『農學會會報』『農學會報』 東京・農學會  
 『農業國』 東京・大日本農業奨励會  
 『農業世界』 東京・博文館
- 『農事雜報』 東京・農事雜報社  
 『半島時論』 東京・半島時論社
- その他に以下の雑誌復刻版・影印版を調査・参照した。  
 『中央農事報』〔復刻版〕全 12 卷，東京・日本經濟評論社，1978～1979 年  
 『朝鮮』『朝鮮及滿洲』〔復刻版〕全 33 卷，東京・皓星社，1998～1999 年  
 『朝鮮公論』〔復刻版〕全 78 卷，東京・オークラ情報サービス，2007 年  
 『帝國農會報』〔復刻版〕全 91 卷（第 1 卷上冊～第 33 卷下冊），東京・龍溪書舍，1980～1987 年  
 『半島時論』〔影印版〕全 4 卷，韓國ソウル・청운，2006 年
- 神戸大学社会科学系図書館  
 神戸大学社会科学系図書館  
 神戸大学社会科学系図書館  
 筑波大学中央図書館，韓国ソウル・国立中央図書館  
 神戸大学社会科学系図書館  
 九州大学中央図書館，熊本学園大学附属図書館  
 神戸大学社会科学系図書館  
 九州大学中央図書館，神戸大学自然科学系図書館  
 鹿児島大学中央図書館  
 鹿児島大学中央図書館，九州大学中央図書館，神戸大学社会科学系図書館  
 九州大学中央図書館，東京大学経済学部図書館  
 韓国ソウル・延世大学校術情報院（中央図書館）